

A
GUIDE TO
THE BEST BOOKS IN
BRITISH & AMERICAN
LITERATURE

英米文学名作解題

大 和 資 雄
成 田 成 壽 共 編
福 田 陸 太 郎



河 出 書 房

英米文学名作解題

英語・英米文学講座

昭和30年10月25日 印刷
昭和30年10月31日 発行

定価 450 円 地方定価 460 円

著 者

大 和 資 雄
成 田 成 寿
福 田 陸 太 郎

東京都千代田区神田小川町3丁目8番地

発行者

河 出 孝 雄

東京都新宿区山吹町305番地

印刷者

石 井 完 一

発行所 株式会社

東京都千代田区神田小川町3丁目8番地

河 出 書 房

振替口座東京 10802 番

帝都第一印刷株式会社

目

次

イギリス篇

目次			
一	ペーオウルフ		三
二	農夫ピアズ		セ
三	カンタベリ物語		二〇
四	アーサー王の死		一五
五	仙界の女王		一八
六	じゃじゃ馬馴らし		二三
七	ロミオとジュリエット		二三
八	真夏の夜の夢		二五
九	ヴェニスの人		二六
一〇	ヘンリ四世		二七
一一	お気に召すまま		二八
一二	二夜		二九
一三	ハムレット		四〇
一四	オセロ		四〇

目 次

一五	マクベス		シエクスピア		五
一六	リ　ア　王		”		五
一七	あ　ら　し		”		六
一八	失　楽　園		ミルトン		六
一九	天路歷程		バニヤン		六
二〇	アブサロムとアキトフェル		ドライデン		七
二一	ロビンソン・クルーソー		デフォー		七
二二	ガリヴァー旅行記		スウィフト		七
二三	ポウプ詩集		ポ　ウ　プ		八
二四	パ　ミ　ラ		リチャードスン		八
二五	トム・ジョーンズ		フィールディング		九
二六	トリストラム・シャンディ		スターン		九
二七	ウェイクスイールドの牧師		ゴールドスミス		九
二八	シェリダン戯曲集		シェリダン		九
二九	サミュエル・ジョンスン伝		ボズウェル		一〇
三〇	抒情民謡集		ワーズワス		一〇
三一	チャイルド・ハロルドの遍歴		ゴ　オ　ド　ン		一〇

三二	自負と偏見		オーステン	二〇六
三三	ウェイヴァリー		スコット	二〇八
三四	エンディミオン		キイツ	二一〇
三五	プロミースュウス解縛		シェリ	二二三
三六	エリアの随筆		ラム	二二四
三七	虚栄の市		サッカレー	二二六
三八	ジェイン・エア		C・ブロンテ	二二八
三九	嵐が丘		E・ブロンテ	二九
四〇	デイヴィッド・コッパフィールド		ディッケンズ	二三三
四一	イン・メモリアム		テニスン	二四
四二	養老院長		トロロプ	二六
四三	サイラス・マーナー		エリオット	二六
四四	指輪と本		ブラウニング	二七
四五	エゴイスト		メレディス	二八
四六	かどわかされて		ステイヴンソン	二九
四七	ダーバヴィル家のテス		ハアデ	二九
四八	人と超人		シヨオ	三〇

四九 ユリッシーズ		ジ ヨ イ ス		四
五〇 ダロウエイ夫人		V・ウルフ		四

アメリカ篇

一 フランクリン自伝		フランクリン		四
ニ リップ・ヴァン・ウィンクル		アーヴィング		四
三 アメリカの学者		エマスン		五
四 緋文・字		ホーソー		五
五 エヴァンジェリン		ロングフェロー		五
六 モルグ街の殺人		ボウ		五
七 アンクル・トムの小屋		ストウ		六
八 ウォールデン		ソーロウ		六
九 モウビィ・ディック		メルヴィル		六
一〇 草の葉		ホイットマン		六
一一 四人の少女		オルコット		七
一二 トム・ソーヤの冒険		トウエイ		七

一三	ヘンリー・アダムズの教育		アダムズ		一五
一四	アウル川橋の出来事		ピアス		一八
一五	国際挿話		ジェイムズ		二四
一六	賢者の贈物		オー・ヘンリー		二七
一七	イーサン・フローム		ウォートン		二九
一八	スプーン・リヴァ詞華集		マースターズ		二九
一九	マクティーン・サンフランシスコの物語		ノリス		三三
二〇	赤色武功章		クレイン		二九
二一	アメリカの悲劇		ドライサー		二九
二二	野性の呼び声		ロンドン		三三
二三	私のアントニア		キャザー		三五
二四	オハイオ州ワインズバーグ		アンダスン		三八
二五	ジャングル		シンクレア		三〇
二六	本町通り		S・ルイス		三三
二七	楡の木蔭の慾情		オニール		三六
二八	計算器		ライクス		三八
二九	大地		バック		三二

三〇	青ざめた馬、青ざめた騎手	アン・ポーター	二四
三一	ジェニーの肖像	ネイサン	二六
三二	仔鹿物語	ローリングズ	二九
三三	ユー・エス・エイ	ドス・パソス	三一
三四	サン・ルイス・レイの橋	ワイルダ	三五
三五	響きと怒り	フォークナー	三六
三六	誰がために鐘は鳴る	ヘミングウェイ	四一
三七	天使よ故郷を見よ	T・ウルフ	四四
三八	怒りの葡萄	スタインベック	四七
三九	タバコ・ロード	コールドウェル	四九
四〇	若いロニガン	ファレル	五二
四一	風と共に去りぬ	ミッチェル	五五
四二	すべて王の臣	ウォレン	五八
四三	レフティを待ちつつ	オデッツ	六一
四四	黒人の子	ライント	六四
四五	人間喜劇	サロイアン	六六
四六	アダノの鐘	ハーシー	六八

四七	欲望という名の電車		T・ウィリアムズ		三
四八	セールズマンの死		ミ		三
四九	裸者と死者		メイ		三
五〇	他の声・他の部屋		カポト		三

第一部
イギリス篇

大
和
資
雄

一、ベ－オウルフ Beowulf 長篇叙事詩

【流布本】Fr. Klaeber (ed.): *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 1922, Boston. 【現代語訳】Mrs. Mary E. Waterhouse: *Beowulf. In Modern English*, 1949, Cambridge: Bowes & Bowes.

第十世紀末の稿本が、かなり完全な形のまま現に大英博物館に保存されているが、正確な制作年代も不明であり、作者も不明、いわゆる口誦伝承の民族的エポス (epos 史詩) の中でも最大の作品の一つといわれ、三千百八十二行ある。王の壮嚴な葬礼に始まって葬礼に終る構想は、北欧民族の嚴肅な宿命觀を現わすものである。

ほまれ高きデーン族の勝利王スキルド・スケヴィング (Scyld Scefing) が死んで大葬が行われ、王の遺骸は武器や財宝と共に船で運ばれたが、その船は海に出たまま行方が分らなくなる (二行^五)。そのスキルドの王子と王孫、ベ－オウルフとヘアルフデネとの治世は早く過ぎて、次の王、ヘアルフデネの子フロスガル (Hrothgar) が壮麗なヘオロット (Heorot) 宴会場を造営し、そこで群臣をもてなす (五三行^一)。しかしこの榮華は、カインの末裔なる怪物グレンデル (Grendel) によって破られ、一夜この宴会場は彼におそわれて、三十人の武士が食いつくされる。誰も彼に対抗できるものがない。そして彼に犠牲を献げるにもかかわらず、ついにヘオロット宴会場は無住

となつて荒れ果てねばならぬ^(一〇三行)。グレンデルがこうして十二年も暴れていた時、ゲータス^(the Gættas)南スエーデン人、古英語では *gæ* は *g* の音となることが多く、イェート族といつてもよい)の王ヒゲラック^(Higelac)の甥、剛力無双のベールオウルフが、フロスガルの助力に行こうと決意し、十四人のともをつれて船出、デンマークの海岸に到着して、フロスガルの王宮に案内される^(三九四行)。王は彼の到着をきいてすぐに会い、ベールオウルフの父エクセオウと親しかったことを語る。ベールオウルフは訪問の目的を述べ、その一行は歓迎の宴会に招待される^(四〇七行)。宴会の席上で、王のオレターのフンフェルスは、ベールオウルフがブレカという男に水泳の競技で負けた話をして侮辱する。ベールオウルフはその話が逆で、彼が勝ったことをくわしく申し開きする^(四九八行)。そのとき王妃ウェアルフセーオウ^(Wealhtheow)がベールオウルフの杯を満たす。彼は勝たずば死すとの決心を告げる。夜が来て王とその群臣はこの宴会場を去って、ベールオウルフの一行だけが居残る^(六〇七行)。彼等は寝に就き、ベールオウルフはよろいを脱ぎすて、剣を使わないと宣言する。グレンデルが広間に押入って、一人の武士を食い殺す。しかしベールオウルフは彼の腕をつかみ、必死の戦いの後、その腕をもぎとる。怪物は致命傷を負うて逃げ去る^(六六五行)。ベールオウルフは怪物の腕を皆に見せ、デーン人らも来てその手柄をほめ讃える。彼等はシゲムンドと甥のフィテラや、デンマーク王子ヘレモッド等、過去の英雄たちのことを思い起して語る。そこへフロスガルの王も来て、ベールオウルフの勝利を祝い、貴重な贈物を彼に与える^(八三四行)。つづいて祝宴が開かれ、そこで王の歌人はフネーフとフィンの物語詩を吟誦する^(一〇六三行)。王妃もベールオウルフに感謝して、貴い頸飾りを彼に贈る^(一二六〇行)。この頸飾は後日ヒゲラック王に愛用され、王の死後フランク族の手に渡ることになるという挿話

(一三〇行) がここに語られている。フロスガル王とペーオウルフとは王宮に退いて、宴席の広間には幾人かの武士が居残ったが、その夜グレンデルの母が現われて、大臣エスクヘレをさらって行く(一三〇六行)。王は悲嘆にくれてペーオウルフをよび、この事件を知らせ、怪物母子の住みかを告げる。ペーオウルフは王に復讐を約する(一三六六行)。ペーオウルフとその一党が出かけてみると、そこは木立の深く茂った沼で、海につづいていらいしい。彼は單身、その水中に飛びこんで洞穴に到り、そこで剣を発見し、怪物の母と死闘してついに彼女を殺し、グレンデルの死体があったので、その首をきって味方の所に帰る。彼等はもうペーオウルフが死んだものとあきらめていた(一三九七行)。ペーオウルフは王宮に帰って、王にこの冒険を物語れば、王は彼の功を讃え、その精神を悲運の英雄王子ヘレモッドと対照させて、高慢の害悪について教訓する(一四八三行)。翌日ペーオウルフは王と別れを告げる。王はさらに贈物を彼にとらせて、つきぬ名残を惜しむ。ペーオウルフ一行は船出して故郷に帰る(一四八五行)。ヒゲラック王の若い王妃ヒグドの美徳が、オフアの悪妻スリソと対照して讃えられる(一五二三行)。ペーオウルフはヒゲラックに冒険を物語る。ここには前に述べられていない新事実もふくまれている。ペーオウルフはフロスガルとウェアルフセオウとからもらった贈物をヒゲラックとヒグドとに献げ、その返礼に王と王妃とは彼に剣と領地とを与える(一九六三行)。

以上が第一部で、第二部の物語はそれからかなり年月が経過し、王位についてからのペーオウルフの武勇譚である。ヒゲラックの死後その子ヘアルドレッドはスウェーデン人民に殺され、ペーオウルフが王位をついで五十年の輝かしい統治が始まる。王がもう老年の頃、国土は火を吐く竜に荒され、王は火竜退治を決意する(二四〇九行)。

ここでヒゲラックの戦死当時のヘーオウルフの奮闘などの話の脱線がある(三三九行)。老王は家来を率いて竜のすみかに近づく。そのときヘーオウルフは祖父や父や叔父たちの代々のことを回想する(三三九行)。老王は家来を外に待機させて単身その洞穴に入り込み、竜と戦ったが剣の刃がたたない。味方の中でウィ格拉フ(Wiglaf)だけが、王を救うため洞穴に進み、その他は皆森に逃げ去る。竜が再び突進してきたとき、ヘーオウルフはその頭に打込んだが剣が折れ、竜に首をつかまれる。ウィ格拉フの助太刀で竜が負傷してひるむ隙に、老王は短刀でそれにとどめを刺す(三三〇行)。だが英雄王も致命傷を負う。王命によりウィ格拉フは洞穴内の宝を持ち出す。王は葬儀について遺言し、彼によろいと頸飾りとを与えて息をひきとる(三三〇行)。逃げたさむらいどもが戻ってきてウィ格拉フに卑怯の行為をたしなめられる(三三二行)。伝令が王の死を伝え、英雄王が死んだから、フランク族や四隣の国から攻められる覚悟をするように予言し警告する。武士たちは洞穴で竜の宝を検査する(三三九行)。ウィ格拉フは王の遺言を繰返す。竜の死体は海に投げられる。王の遺骸は遺言どおり火葬にされる。国民の深い哀悼。その墓の塚をめぐる十二人の武士がヘーオウルフ王の遺徳を讃える。

スカンチネヴィアには類似の伝説があるが、史実として第六世紀の初期のことが推測されるだけで、主人公の英雄王そのものは伝説であろう。原型は異教時代の制作であり、後の詩人たちによってキリスト教精神がとり入れられ、両者が調和されている。渡英以前のアングロサクソン民族の生活や道徳や宿命観を知るためにも最も重要な国民文学である。その詩形は毎行四つの強勢音節をふくむ頭韻詩で、英詩の源流の一つとなっているが、何分にも古英語で書かれてあるため、原文で鑑賞できるものはまれである。